

ものゝ如し否白歯に眉毛あるを大に笑ふ風あり

(46) 別に有害なりとの意向なし

(47) なし

(48) 剃眉は必ず一子を擧げたる後なりモロ親ある婦人をたのみて剃るなり五ヶ月目に帯締の式あり産婆及び親類相集り赤飯等の饗應をなす

(49) 避遠の漁浦完全なる一の器具を備ふるものは殆んど稀なり先づハンゾウ位なり其形状は同じ

(50) ○
(51) 時潮に感染するものと認む上流者を真似るに止まるならん

(52) ○
(53) 居村は農商漁の雑居なり漁農家は依然舊慣を守りて涅槃す商家の十中三四は染齒せざるが如く併し今三十才以上の婦人は總て染め居るなり

○大阪の人類館

松村 瞭

○大阪の人類館

今回大阪に博覽會が開設せられたに就て、その餘興の一として學術人類館なるものが設けられた事は、既に諸君の知らるゝ所と思ふ。坪井理學博士にも其の擧を賛成せらるゝ事となつて、人類學教室よりは、種々の土俗品を出陳し並に同博士の立案に成る人種地圖をも送る事となつた。予は同博士の命により同館出陳の土俗品等を整理する爲め、大阪に赴く事となつた。所が思ひ掛けず、永く滞在する事となつて、三週間も居つた故、人類館に就て觀察する事も少くなかつた。依て此處には人類館に就て見た所の概畧を述べようと思ふ。

先づ人類館を這入ると陳列されてあるものは諸種族の寫真である。今此を分類すれば次の通りである。

- アイヌ 九枚 琉球人 四枚
 - 臺灣生蕃 二枚 アジア住民 三枚
 - マレー諸島住民 三枚 南洋諸島住民 五枚
 - アウストラリア人六枚 アフリカ住民 十一枚
- 此等の寫真中アイヌ、琉球、臺灣を除く外は、悉くハッチンソン氏外二名の合著『現存の人種』(The Living Races

of Mankind)と題する書の挿圖を、長さ一尺六七寸、幅一尺一二寸に引き延ばしたものである、此は餘程好い思付と思ふ、然し此等の寫眞は専門學者の撰出したものでないから、兎角異様の風をなし、野蠻氣に見ゆるものゝみ多く、全世界に行き渡らないで、歐洲人、アメリカ人ジベリア人等の絶無なるが如きは、甚だ遺憾とする所である。

次は各種族の住居であるが、今日その内に生活しつゝある者を、種族別にすれば次の通り。

アイヌ	七名(内女二名)	琉球人	二名(女)
生蕃 <small>ルタイヤ種族</small>	一名(女)	熟蕃	二名(男)
臺灣土人	二名(男女)	マレー人	二名(男)
ジャヴァ人	一名(男)	印度人	七名(内女二名)
トルコ人	一名(男)	ザンデバル島人	一名(男)

此等の外に曾て朝鮮人の女二名居つたのであるが、或事情のため今日では解僱してしまつた。而して彼等は彼等固有の家屋に住せると云ふ趣向で、其家屋の構造は幾分か固有の風に近いが、未だ吾人をして満足さする譯に

は行かない。然しアイヌの家屋は遙々北海道から一つのアイヌ小屋を取り崩して運搬し來つて造たのであるから諸種族の家屋中最も眞に近い方である。

上記した諸種族中、アフリカのザンデバル島の者は、吾人の眼には、珍しい方である、彼に其の何處の人なるかを問ふと、アラビア人と答ふるけれども、彼の縮みたる頭髮、チヨコレート色の皮膚、幅廣き鼻、厚い唇、顔の平らで廣い所は、ニグロに類似して居る事を、蔽ふ事の出來ぬ證據物である、予はザンデバル附近に住する種族の名を數多擧げて問ふた所、スアヒリ種族との事をも答へた。其處で予は、アラビヤ人とスアヒリ種族との雜種子であらふと考へた、然かも彼のニグロ(廣義に於ける)に近い體質を有する所より考ふると、恐くは數代前彼の親たる者がアラビア人であつたのであらふ。人種の事を記した書二三を見た所、ザンデバル附近には、曾てアラビア人の勢力を得て居た事著しく、従てスアヒリ種族との雜婚も多く、其の雜婚に依て生じたる子孫は彼等自身には、アラビア人と稱して居るとの記事もあつた。此

れに依ると人類館のザンヂバル島人がアラビア人と答ふるも同理である。然し彼は純粹ニグロではなく、類似ニグロであらふ、予は彼の頭の最大長及び最大廣を測定し、其の指示數を求めた所、七六、五を得た。

又マレー人中日、英、佛、スペイン、マレー、インド等の諸國語を話すものがある。つまり印度人、トルコ人等の通辨をして居るのである。彼も彼自身には印度人と云ふて居るが彼も決して純粹の印度人でないと云ふ事は、頭髮の黒く直なると、鼻の高からざると、顔形等に依て知る事が出来る、予が最初に問ふた時には、印度人と答へたが、どうも受取り兼ねるので詳しく聞いた所、父は印度人母はマレー人との事を白狀した。故に彼も雜種子であつて上記の性質はマレー的であるが、彼れのマレー人としては、比較的、ひげの多い所は、印度人の性質を遺傳した點と思はれる、尙七名の印度人中にも恐くは雜種子ならんと思はる男が一名居る此は詳しく調ぶる暇がなかつた。

斯の様に觀察し來たると中々面白いものである、故に彼

等の言ふ所を其儘信ずると、大なる誤を生ずるから會員諸君にして若し人類館御見物の節は充分の御注意あらん事を希望するのである。

檳椰子の實を嗜好物として噛むの風はマレー諸島シヤム等に行はれるが、人類館に居る印度人も男女共に之を嗜むの風がある。近頃本誌第二百二號に、シヤム人の檳椰子の實を噛む事を書いたが、其の風はまあ、あれと同様である、予の實見した所を記すと、檳椰子の實（マレー語ではPinang）を石製の組に載せ、長さ一尺直徑二寸五分程の丸き石棒で、好い加減に碎き、其の一片を先づ口中に投じ、同時にベテル、ペッパアと言ふ植物（其の名に基く）の葉へ石灰を指にて塗り、此を簡單に卷いたものを口に投じ、檳椰子の實と共にクチャ／＼と噛み、暫時にして赤色の汁を吐出するのである。故に彼等の舌は常に赤色を呈して居る。斯る風は我々日本人に取ては餘程面白く感ずる所である、印度人は常に薄着が習慣である爲め、日本へ來てブル／＼振へながらも矢張り薄着である。此れ風習の然らしむる所であらふ。其の他諸種族に

就て面白き事をも觀察したが此處には略して置う。

次の室には坪井理學博士の立案大野雲外氏の書に成る縦一間半、横二間半の世界地圖を四十五度の傾斜に張り、其の上に彩色せる六七寸の切抜人形を立てたもので、其の種族は世界中より主要なるもの五十通りを選出されたもので、主に男女一對づゝである、一度此を見れば、世界の如何なる地方には如何なる種族分布するか、甲地と乙地との種族は容貌風俗等が如何に違ふか、將た人類には體質風俗の異なる者が概ね幾通りあるか等の事を知り得て、教育上頗る有益のものと言はなければならぬ。

次は土俗品の陳列室で、主に人類學教室貸附の品が大部分を占めて居る、此を地方別にすれば次の通り、

北海道(アイヌ)

朝鮮

臺灣(生蕃)

ビルマ、

印度、

ペルシヤ、

マレー諸島

南洋諸島

アウストラリア、

北アメリカ

右等の外に祝部土器も數個出陳されてある。

人類館なるものが日本に設立せられたのは、今回を以て嚆矢となすのである、日本人には物新しい爲めか種々の批評もある様である、實際其の規模も小く、集められた諸種族も日本版圖内或は比較的多く吾人の眼に觸るゝ所の種族で其他一般の設備も不完全たるを免れないが、私立て然かも短日月間の事業としては恕すべき所もある、兎に角今人類館が世人に與ふる利益は少くないと思ふ、吾人は幾分なりとも世人に人類學的思想を授くる事が來れば満足するのである

○北海道渡島國森村發

見の石器時代遺物(卷首圖參照)

村 岡 格

渡島國茅部郡森村大字森字柳原で得た石器時代遺物を聊か報告いたします是は昨三十五年十二月上旬より當森村の上臺ウロダイと申す所へ公立森尋常高等小學校を新築せんとて從來柳原市街より南方に進て坂道あり此處前面火山灣を隔て後方羊蹄山を直視し右方は駒ヶ嶽を望み左方は連山波濤の如く彌風光縱ひまゝなる佳境として校舎の敷地に